AACK 京都大学学士山岳会 No.58

# Newsletter

September 2011

http://www.aack.or.jp

目次

AACKのアイデンティティー　AACK新会長　松林公蔵……1
一般社団法人への移行認可について　伊藤宏範……2
一九六〇年代アーカイブスの作成について　アーカイブス作成委員会　酒井敏明……5
ガネッシュ・ヒマール探訪（二〇一一年四月六日～五月九日）　阪本公一……6
大興安嶺探検のマル秘「報告書」と再訪の旅　斎藤清明……14
人の生老病死と高所環境―「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応　奥宮清人……19
会員動向……22
編集後記……22

## AACKのアイデンティティー

AACK新会長　松林公蔵

本年の総会で、上田会長の後継として、AACK会長に任ぜられました。AACKはまた、本年六月に、会員の総意と事務局の努力のおかげをもちまして、「社団法人」から「一般社団法人」へと移行いたしました。本稿では、私自身が人生において多大な影響を受けたKUAC、AACKの知的伝統に謝する意味でも、少し、考えるところを述べてみたいと思います。

一九三一年に創設された当初のAACKの目的は「ヒマラヤ未踏峰の初登頂」にありました。しかしそのベースには、「AACKとは、京大式の山登りを通じて、新たな知的領域を切り拓くことに情熱をもつ山なかま集団」というアイデンティティーがあるように思います。AACKがこれまで達成してきた営為は、(1)ヒマラヤ初登頂、(2)探検精神を基礎とした新たなフィールド研究領域の創出、(3)知的探検に富む山登りの実践とその喜びの共有でした。AACKは、京大式の山登りを基本においておりますが、会員は必ずしも京大出身者には限らず、志を等しくする岳友にも広く門戸を開いてまいりました。しかしそこに共通するのは、個人としての自由なロマンを前提としながらも、目的達成のための仲間との連帯、よろこびの共感にあったように思います。AACKの「岳統」ともいうべきこのアイデンティティーは、八〇年間にわたって継承され、現在でも共有されております。

私自身は、一九九〇年のシシャパンマ研究登山以降の二〇年間において、登山・探検から啓発された「フィールド医学」という研究領域を一部の仲間とともに創出し、老化という人類普遍の課題を、本邦、アジア・アフリカ、そして世界の高地に住む人々を対象に展開するようになりました。「フィールド医学」の仲間の多くはAACK会員です。

一方で、組織としてのAACKに徐々に変化が起こってきたのは、未踏峰の減少に伴う登山価値観の多様化、そして会員の高齢化という現実でした。しかし、組織の目的の革新や社会の高齢化は、日本全体のみならず地球全体の構造的趨勢でもあります。

生命進化のうえでの基本原理は、「子孫を残すに十分なだけ生きる」ことでした。しかし、二一世紀の人

類は、「繁殖後にも十分長く生きる意義」の創造という、これまで生命進化のプリンシプルでは簡単には解けない文化的な課題に遭遇しております。地球規模の高齢社会において、老若が交響する豊かな社会的枠組みを、私たちの「叡智」がはたしてつくりだせるか否かは、二一世紀人類の最大の課題となるでしょう。

二〇年前のシシャパンマ登山では、二〇歳代から六〇歳の斎藤先生・中島先生までが協働して、ともに八千メートルに登頂し話題ともなりました。しかし、この二〇年間で、年齢という意味では、六〇歳の関門などまたたくまにやぶられ、今では、八〇歳のエベレスト登山が論議されております。

山登りの価値観は現在、登山の対象、スタイル、年齢、登山の楽しみや意義など、その全般にわたって多様化しておりますが、多様ななかでも、徐々に、個別の要素還元的な方向へ進んでおります。登山の個別化・多様化が滔滔と進んでいる現在、ＡＡＣＫのアイデンティティーである総合性と未知へのロマンティシズム、そして何よりもまた、立場・年齢を超えて自由に批判・議論ができるシビリズムの共有は希少・貴重と思われます。

ＡＡＣＫが若者たちの登山を理解して志を継承しつつサポートし、あるいは、将来のフィールドワーカーを目指す若者にフィールド研究の方法とロマンを伝えるという、これまでも実践してきた教育的な側面をより重視することによって、世代間の交響がさらに深くなることを切望するものです。

ＡＡＣＫの今後のありかたについては、早くは一九六五年頃から本多さんの「解散論」が始まり、その後、いくたの議論を経て、一九九七年の上田さんの「引退論」から二〇〇七年の「サロンの楽しみ」という議論もありました。本多さんの論がおこったときのＡＡＣＫの年齢は壮年三四歳、一九九七年の上田さんの「引退論」は六六歳、「サロン論」は七六歳でした。それぞれの時代に応じて、それぞれに説得性があります。

長らく、人の一生は六〇年くらいとの前提のもとに、社会の枠組み、価値観がつくられてきました。政治、経済、哲学、文学といった人間の基本的な思考も、人生六〇～七〇年くらいが前提でした。あとの幸運な人生は余生として捉えられてきました。登山においても例外ではないと思います。

しかし人類は現在、人生八〇年型、九〇年型の社会を迎えております。若い頃に燃えるような情熱をもって山に登り、社会の現役時代はそれぞれの道を歩み、そして熟年になって到達する登山・探検観とは何か？

この問いに対するメッセージは、登山・探検領域に限らず、今、人類に普遍的に求められている地球規模のパラダイム転換に対する回答にもつながると思われます。ＡＡＣＫのポテンシャルは、熟年先輩たちの未踏峰踏査の実践、雲南懇話会の活動、フィールド研究者たちの新領域創出と若者養成、それを支える事務局の営々たるボランティア作業、そして最も大切な「自ら楽しむ」ことに価値をおきながらも、組織をいとおしく思う気持ちに、あらわれているように印象されます。

ＡＡＣＫは、従来の「社団法人」という紋服から「一般社団法人」へと軽装化しました。組織年齢八〇歳とはいえ、会員個々の発信力、教育的知性はたいへん旺盛で、ひいては社会一般にも十分貢献できる存在と考えられます。ＡＡＣＫが、登山・探検を通じての知的パイオニアワーク領域において、「塾年の叡智」と「若者の夢」が交響できる場として機能することを期待してやみません。

よろしくお願い申し上げます。

## 一般社団法人への移行認可について

伊藤宏範

一九三一年五月に創立されたＡＡＣＫは、一九六〇年一月社団法人京都大学学士山岳会として、民法の定める公益法人となり、このたびの公益法人制度改革による法律の制定により、二〇一一年六月一般社団法人京都大学学士山岳会に移行認可となった。創立八十年にして長々とした名前になったわけである。以下では、社団法人から一般社団法人への移行についてと、これによって変わったこと、変わらないことを述べる。なお、内容については一部、新公益法人制度に関する説明会で

配られた内閣府・公益認定等委員会事務局が発行するパンフレット『民による公益の増進を目指して』等から引用した。

これまでの民法による制度では、主務官庁（監督官庁）に公益性が認められたものだけが法人格を得ることができ、法人運営については、法律上詳細な規定がなく、主務官庁が立ち入り検査を含め監督しており、法人設立・運営のための要件は、各主務官庁の裁量権に委ねられており、主務官庁ごとにばらつきがあったとされていた。そこで、民間非営利部門の活動の健全な発展を促進し、民による公益の増進に寄与するとともに、主務官庁の裁量権に基づく許可の不明瞭性等の従来の公益法人制度の問題点を解決するために、新たな法律「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」（法人法）、「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」（認定法）、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」（整備法）とこれらに伴う政令、府省令、ガイドラインが制定された。二〇〇六年六月のことである。これらの法律により、これからは、法人法の要件を満たせば、登記のみで一般社団・財団法人を設立することが可能になり、一般社団・財団法人のうち、認定法に定められた基準を満たしていると認められる法人は、公益認定を受けて公益社団・財団法人となるが、基準を満たしているかどうかの判断は、民間有識者から構成される、国の公益認定等委員会・都道府県の合議制の機関が行うことになった。

公益法人制度改革の動きの当初からＡＡＣＫでも理事会、総会において今後の組織体制のあり方について議論が進められてきた。新しい法律の制定により、二〇〇八年十二月に民法上の公益法人は自動的に「特例民法法人（特例社団・財団法人）」となり（関係民法条文は削除）、五年後の二〇一三年十一月末までに、一般社団・財団法人、公益社団・財団法人へ移行認可、認定されなければ、強制的に解散させられ、残余財産は他の公益法人等へ寄付しなければならないと定められた。法律制定前後から役員・会員が内閣府の説明会に出席したり、京都府の担当課（総務部政策法務課）へ何回も相談に行ったりして、ＡＡＣＫとしては、これまで以上に監督が厳しくなる「公益社団法人」よりも、ゆるやかな「一般社団法人」を選択することになった。申請する行政庁としては事業活動が複数の都道府県どころか海外にまで及ぶことから、京都府ではなく内閣府となった。二〇一〇年の総会で一般社団法人への移行と新しい定款の承認を得て、二〇一一年三月内閣府に電子申請し、内閣府でのヒアリング、メールのやり取りを経て、六月公益認定等委員会が答申し、内閣総理大臣菅直人名で認可書が交付され、登記も完了した。登記完了届により、一九六〇年から五十年間続いてきた文部科学省の監督が終了することになった。

特例社団法人から一般社団法人への移行認可のためには、定款の内容が法人法に適合するものでなければならないため、定款を大幅に変更することになった。用語も法人法にあわせた。会員は法律では、社員となるが、会員という呼び名が定着しているので、会員のままとし（定款第五条）、総会を社員総会（定款第四章）とした。役員（第五章）では、これまではすべての理事が権利義務を負っていたが、会長を「代表理事」（登記事項）とすることで、株式会社でいうところの「代表取締役」と同じように、代表理事一人が法人を代表し、業務を執行することになる。副会長は会長を補佐し、各理事は理事会を構成し、法令・定款に定める職務を行うこととなる。常務理事制度はなくなり、評議員も社団法人ではおけない。理事会はこれまで委任状も含めて三分の二以上の出席が必要とされていたが、これからは委任状出席は認められず、必ず本人出席として過半数の出席が必要とされる。そこで、これまで理事は十五名以上二十名以内としていたが、必ず出席できるよう五名以上十五名以内と少なくした。なお、監事は二名または三名から、二名以内と変更した。現在の理事数は十五名、監事は二名である。理事の任期はこれまでどおり二年であるが、監事は理事の職務執行の監査を強化するために四年に延びた。株式会社の取締役、監査役の任期の違いも同じ趣旨である。これらの変更は、法人法に基づき、行政庁が定款ひな型を出しているので、それを参考にした。そうしないと、条文の整合性が取れないほど法律が精緻化している。定款は京都府担当課へ相談に行き、チェックしてもらい、内閣府への申請後において、正式にチェックを受け、一

部修正している。最終決定したものは、七月名簿といっしょに、会員に事業報告・計画とともに届けられた。

移行認可のためのもうひとつの条件は、法人の移行時の純資産額を基礎に計算した「公益目的財産額」がある法人は、作成した公益目的支出計画が適正であり、確実に実施すると見込まれるものであることである。このために、申請時において、二〇一〇年三月末の正味財産八百三十五万円をこれまでの事業を継続するとして四年間で使い切る計画を立て、内閣府の承認を得た。実際には、正味財産が二〇一一年三月末で七百八十三万円、正確に言うと社団法人の最終決算が二〇一一年六月二十一日である（定款の付則二参照）ので、もう少し少なくなるが、そこから始めて、なくなるまでの間、公益目的支出計画の実施報告（所定の計算書、電子申請）を行政庁である内閣府に毎年報告する必要がある。使い切った年度でもって終了し、次年度からは内閣府に対して何も報告する必要がなくなる。公益目的支出計画の計算には、会費等の収入や事業支出でない管理支出は含まれず、ＡＡＣＫの収支と毎年ずれていくことになる。これまで実施してきた公益事業の事業支出は二〇〇九年度二百二万円、二〇一〇年度は百六十七万円であるから、七百八十万円余を使い切るには四年から五年かかるとみている。なお、ＡＡＣＫの収支は卒業後五十年以上の会員の会費免除制度を中止したので、数年で底をつくという事態にはならない模様である。今回の改革で直接の影響はないが、税制では収益事業についてのみ課税されるところ、もともとＡＡＣＫは収益事業を行っていないので課税対象事業がない。寄付金に対して、寄付した側の免税措置は公益社団・財団法人では優遇されるが、一般社団・財団法人にはない。以前からＡＡＣＫに対する寄付金免税措置は、社団法人としてではなく、別のルートで協力を得たものであるから、これも変化があったわけではない。公益社団法人になれば、優遇されるが、そのための毎年の報告、監督、立ち入り検査等事務負担は代わりに大きくなる。

旧定款には文部科学大臣への届け出、承認を得る事項があった。例えば、事業計画および収支予算の届け出、事業報告および収支決算の報告、負債の発生・債権放棄の承認、定款の変更の許可、解散および残余財産の処分の許可などであり、定款にはないが、総会・理事会の議事録の届け出、役員の就任・辞任の届け出、毎年前記の事業報告・収支決算の報告とは別に所定の形式による事業報告の届け出、さらに、数年おきの立ち入り検査が実施されていた。しかし、新定款には行政庁（主務官庁、監督官庁）にそのつど許可を得たり、届け出たりすることは明文化されていないし、立ち入り検査もない。事務負担は大幅に軽減されることになる。整備法によって、公益目的支出計画の実施報告が必要とされるのみである。計画が終了すれば報告の必要もなくなる。主務官庁への届け出等がなくなることを除けば、本来の活動には変化はない。理事・監事の役員を社員総会で選解任し、事業計画・収支予算を理事会で承認し、事業計画に沿った事業を活発に行い、年度終了後に事業報告・収支決算・財務諸表を作成し、理事会での承認、社員総会での承認を得て、議事録を作成する。定款を変更するのであれば、社員総会での承認で済み、万が一、解散することになれば、残余財産の処分も含め、社員総会で決める。

原則として、一般社団法人は法人の自主的な運営が可能で、法人の創意工夫により不特定多数を相手とする公益事業、特定多数（会員）を相手とする共益事業、その他柔軟な事業の展開が可能となっている。ただし、非営利部門の活動であるから、剰余金の分配（株式会社でいうところの配当金の分配）はできないし、そう定款にも明文化している。

全国には、国所管の社団・財団法人が約七千、都道府県所管の社団・財団法人が約一万八千あり、まだそれほど移行が進んでおらず、移行期間の後半のあと二年で大部分が移行するものと思われ、行政当局も駆け込みに備えていると聞く。幸いに、ＡＡＣＫはこれまで会長をはじめ、役員・会員の関心が高く、方向性も一致し、それぞれ貴重な時間をさいて移行認可に取り組んできた。最後に電子申請するときは、ただ事業報告・収支決算、事業計画・収支予算、財務諸表、新旧定款等の電子データを切り貼りするだけで必要十分な申請書類となった。東京虎ノ門にある内閣府でのヒアリングもそれほど疑問点も出されず、事業報告・計画で簡単に述べてある活動を担当者に詳しく説明しただけである。修正

事項もあまりなかった。これも、これまで準備してこられた関係各位のご努力のたまものであると、最後の手続きを任されたものとして感謝申しあげる次第である。

## 一九六〇年代アーカイブスの作成について

アーカイブス作成委員会　酒井敏明

先刻ご承知のようにＡＡＣＫは一九三一年五月「ヒマラヤに行くために」創られたクラブであり、戦前にカブルーとＫ２という具体的な遠征計画を二度立ちあげながらともに挫折した失意の歴史をもちます。この宿願を初めて実現したのは一九五三年アンナプルナⅡ峰・Ⅳ峰の遠征でしたが、悪天候にはばまれて退却を強いられるという結果に終わり悔いが残りました。

雌伏五年、カラコルムの高峰を登った最初の日本隊となった一九五八年チョゴリザ隊（桑原武夫隊長）が初登頂に成功、二年のちにはヒンドゥクシュに舞台を移してノシャック（酒戸弥二郎隊長）初登頂が成りました。

今年創立八〇周年を迎えるＡＡＣＫは今やその老年期に入ったとみなすべきなのかどうかわかりませんが、働き盛りの三〇歳代に相当する一九六〇年代にはノシャックとサルトロ・カンリに登り、会員の主たる供給源であった京都大学山岳部もまたインドラサンとガネッシュに登山隊を派遣、ともに初登頂に成功しました。

当時の京都大学は〝探検大学〟の異名をもって呼ばれたほど、海外登山の第一線を切り開いていたといっても過言ではありません。上記の例のようにクラブが独自の隊を直接に組織し派遣しただけではなく、個々の会員が京都大学生物誌研究会、京都大学探検部のような他のグループの企画に隊長または隊員として参加し、ブータン、オセアニア、アンデスなどなどのフロンティアに出かけた場合も珍しくありません。

ＡＡＣＫ自体が古希だ傘寿だと歴史をかさねるのと並行して会員の平均年齢が高くなることは避けがたい現象であり、草創期の先輩たちはいうまでもなく、昭和十年代に活躍した第一世代の人たち、昭和二〇年代に活躍した第二世代の人たちのなかからも今や鬼籍に入った人が少なくありません。

こうした状況を背景として去る五月の本年度総会において、元会長高村奉樹さんが、「一九六〇年代のノシャック登頂以後約一〇年間のＡＡＣＫもしくはその会員による遠征・登山隊の活動記録として既刊図書、雑誌記事、映像資料を収集整理し、ＡＡＣＫアーカイブスに加えてはどうか」とする事案を提議しました。若干の議論がおこなわれたのち、その方向で進めるべしとの決定を見たのであります。

その後当時の事情を知る立場にあった会員数人が寄り集まって意見を交わし、調整を諮ったうえで竹田晋也常務理事他と相談し、アーカイブス作成委員会を発足させることになりました。

第一回委員会は去る六月二日吉田構内北西隅、総合研究二号館四階の竹田研究室に平井一正、高村、前田司、竹田の各氏と私の五人が集まり、開催されました。本会の文書ファイル、写真アルバム、刊行物の保存用部数などの一部は借りている外部の倉庫および竹田研究室に一時的に保管されています。図書は京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に寄贈され京都大学付属図書館に配架、閲覧に供されていますが、重複する書籍雑誌類は同じくこの研究室の書棚を占拠しているのです。

この委員会が対象とする遠征隊は一九六〇年～七〇年の期間にＡＡＣＫおよびＫＵＡＣが派遣した遠征隊のほかに、他の組織が出した隊にＡＡＣＫ会員が参画したものについてはその後の会との関係などを考慮して採否を決め、別掲の一六件とすることになりました。同じ時期に多くの会員が南極観測事業に参加していますが、この方は実施主体が国であり、書類その他の資料万般は適切に整理保管されている筈であることを理由として、当委員会は関与しないことを決めました。

一九七〇年代にはヤルン・カン（一九七三年）をはじめＫ12峰、ブータン、ヒマラヤ氷河調査など多彩な活動が展開されましたが、件数が増えるとともに参加者が多数にのぼり、かつ年齢構成をみてもなお資料収集整理が喫緊の要事と考えなくともよいとして、今回の作業の終期は一九七〇年にしたのです。

基本的な収集方針は「重要とおもわれる文

書について、まずリストアップし所在を明確に記録し、可能なかぎりＡＡＣＫ事務局で管理する。映像・音声・器物などの資料もできるだけ同様に管理する」ことと要約できるでしょう。

画像については、モノクローム、カラーの写真フィルムは主要なものを選んでデジタル画像に変換、ムービーやヴィデオ映像はひとまずＤＶＤ化する予定であります。

委員長は酒井が任に当たることが決まりました。

調査を依頼する各遠征隊の担当者を選ぶこと、回答記入用の調査票の案を作ることが、次回会合までになすべき宿題であることを了解して、初の会合は終わりました。

第二回委員会　六月三〇日　場所は同じく竹田研究室

アンケート用書式を決定しました。蒐集対象一六件のうち関与した会員が現存しないなどの理由で委員会自体が作成しなくてはならない三件（左のリストで＊を附した）を除き、回答票記入を依頼する担当者を定め、一三隊に依頼状と書式フォームを書状で送ることにしました。回答は七月二〇日までにメールで送付してもらうことにし、締切日の数日後に次の委員会を開く予定にしました。

今回調査の対象とする遠征・登山隊は次のとおりです。

(1) 一九六〇年　ノシャック
(2) 一九六一年　サルトロ・カンリ予備調査
(3) 一九六二年　サルトロ・カンリ登頂
(4) 一九六二年　インドラサン
(5) 一九六三年　スカルノ峰
(6) 一九六四年　ガネッシュ
(7) 一九六四年　カンチ・ウェスト交渉
(8) 一九六五年　ティリツォヒマール偵察
(9) 一九六七年　＊ヤルン・カン登路偵察
(10) 一九六七年　＊東海大ネパール
(11) 一九六七年　パタゴニア
(12) 一九六八年　ブータン
(13) 一九六九年　＊ＪＡＣエベレスト偵察
(14) 一九六九年　ブータンヒマラヤ登山交渉
(15) 一九七〇年　ＪＡＣエベレスト登山
(16) 一九七〇年　ブータン人類学的調査

第三回委員会　七月二五日　場所は同じ

委員会がおこなう仕事の範囲および方法について再度ツメの議論をし、より具体化、明確化することを目指すことを話し合いました。

回答を依頼した一三隊のうち一〇隊からメールによる調査票を当日までに得ることができました。他の隊について再考した結果(10)はその後の会との関連が浅いため除外すること、(7)と(9)は一つにまとめるのが適当と考えられたのでそのように変更することにしました。総数は一四隊になります。

資料の収集管理の場所としてはさしあたり竹田研究室の一隅をお借りすることになるのですが、これは一時的集積所に留まらざるを得ず、最終的には京都大学図書館、同博物館、同アーカイブスなどに受け入れられるように努力することが必要と思われます。

回答があった一〇隊およびこのあと届くはずの調査票は、個別に検討を加え、委員会において増補拡充に努めることになりますが、回答者に個々に問い合わせることが必要になる場合もあるでしょう。回答者もしくは他の関係者が重要な資料を所有または保持している場合にはそれをＡＡＣＫに譲渡してくださるようお願いすることが必要になります。調査を依頼した方はじめ関係の皆様には協力していただきますようお願いします。文書ファイル、写真アルバム、書簡、スクラップブックの類などは委員本人の周辺にもあり、とりあえず散逸亡失を防ぐために各隊別の資料保管ケースを事務局（竹田研究室）にそなえてもらうことになりました。

アーカイブス作成委員会は、平井一正、高村奉樹、前田司、竹田晋也、酒井敏明の五人がメンバーでこの仕事を担当しておりますが、皆様の絶大なご協力を得て順調に進行することを願っています。

## ガネッシュ・ヒマール探訪（二〇一一年四月六日～五月九日）

阪本公一

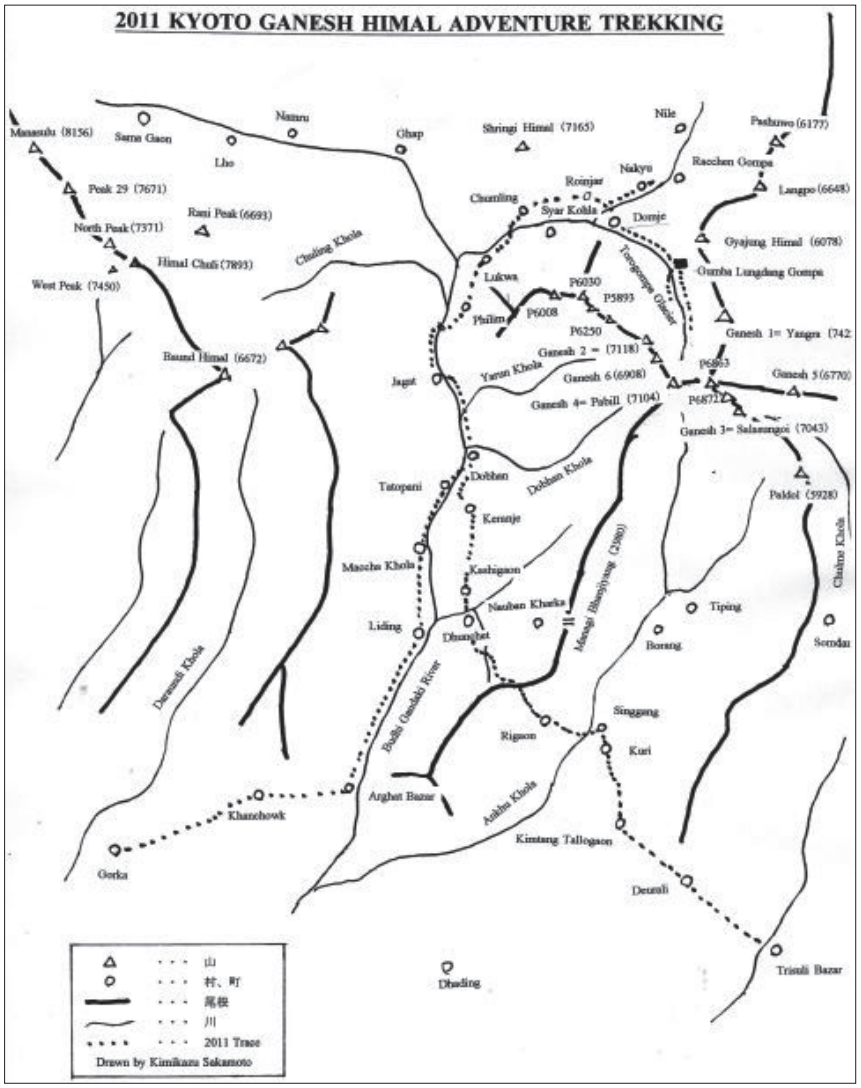
ガネッシュ・ヒマールはランタン山群とマナスル山群の間にある比較的小さな山群であるが、七〇〇〇m峰が四座ある。二〇〇一年と二〇〇九年に私はランタン谷からヘランブーを歩いたが、ゴザインクンドの手前から

眺めたガネッシュ・ヒマールの山々に魅せられてしまい、是非機会をつかんで探訪してみたいと計画を暖めてきた。

ガネッシュ・ヒマールは、日本人との関わり合いの強い山群だが、意外と我が国でも知られていない。一九五三年の日本山岳会第一次マナスル遠征隊の学術班であった川喜田二郎さんと中尾佐助さんが、アンナプルナ山群からマナスル山群を探査された後、ガネッシュ・ヒマールのシャール谷に入り、カルチェ村（仮名）に滞在してガネッシュ・ヒマールの北面を眺めてこられた（川喜田二郎著「ネパール王国探険記」）。

その翌年の一九五四年に、日本山岳会第二次マナスル遠征隊がマナスルより転進し、トロゴンパ氷河よりガネッシュ・ヒマール一峰に試登した。

ガネッシュ・ヒマール概念図




一九六四年にアンナプルナ南峰（七二一九m）を初登頂した京大山岳部隊の島田喜代男さんと上田豊さんの二名が、ランタン谷を探査した後ガネッシュ・ヒマールの南面を越えてマナスル山群へのトレッキングを行っている（朝日新聞社発行「ガネッシュの蒼い氷」）。

インターネットで検索してみても、ガネッシュ・ヒマール産のヒマラヤン・クオーツ（水晶）の宣伝ばかりで、ガネッシュ山群の登山記録は殆ど掲載されていない。ヒマラヤ名峰辞典を参照して、ガネッシュ・ヒマールの初登頂の記録を参考にさせて貰った。

今回のメンバーは、七〇歳の三人（宮川清明さん、八太幸行さんと私）。最近 Arghat Bazar まで車で入れるようになったらしいが、私達は Gorka から昔のマナスル登山隊と同じクラシック・ルートで Gorka から Khanchowk を経て Budhi Gandaki 河沿いの Arghat Bazar へ歩く事にした。Gorka は、プリチビ・ナラヤン・シャハ王が一九六九年に「ゴルカ王国」として国家統一し、現在のネパール王国の礎となった地である。英国の傭兵として勇猛果敢なグルカ兵の出身地としても有名。

四月九日にカトマンズを車で出発し、途中での昼食時間も入れて約五時間で Gorka 着。ホテルへ投宿後、下の王宮、上の王宮を訪問。観光客も多く、何となくガサガサした感じの町であった。

Gorka からトレッキングが始まったが、Khanchowk への旧道からは見事に耕された棚田と蜜柑畑や梨畑が見渡され、小ぎれいな民家が立ち並んでいた。この近辺の農家の豊かさが想像された。

Khanchowk の村から突然新しい車道が現れた。トレッカーには誰一人出会わなかったが、砂埃をあげて走る工事用のダンプカーには閉口した。残念ながら、前日もこの日も春霞のかかる天候でマナスル連峰は全く見られず。

一九五〇年代のマナスル登山隊の時代は、Budhi Gandaki 沿いの道は、ゴルジュ帯につけられた狭い危険な道で、しっかりした橋もなかったそうで随分苦労されたそうであるが、現在は幅の広いしっかりした道に整備され、吊り橋も全てワイヤーの頑丈な橋が架かっていて歩きやすい。Arghat Bazar から Jagat まで三日の行程とし、途中の Tatopani では温泉の湯で顔を洗う程度で通過し、のんびりしたトレッキング道を歩き四月一二日に Jagat 着。

Jagat の MCA (Manasulu Conservation Area) のチェック・ポストによると、一九九五年にマナスル山域が一般に開放された時は入山者はたったの三四八人だったが、その後年々トレッカーが増え続け、昨年二〇一〇年は二三二二人になった由。マナスル街道の道も毎年整備して、道迷いのないようにと要所には新しい道標を立てたとのこと。二〇〇八年から Syar Khola の奥の山村やゴンパを訪れるトレッカーの為に「Tsum Valley」と言う名称で新たにトレッカーの入域許可を出すようになった。欧米人を主体にボチボチとトレッカーも増えてきているとの由。係官によると、日本人で Tsum Valley や Torogompa Glacier に出かけるパーティは、全く記憶がないとの説明であった。Syar Khola 沿いの道で、私達も四パーティの欧州人に出合ったが、日本人には全く会わず。

マナスル街道沿いの村は、何処もゴミを捨て放題のゴミの村ばかり。いささかうんざりしていたところ、四月一三日に Jagat を出て直ぐの Jagat の上村「Saleri」で、村の道のゴミを拾い雑草を取って清掃している御婦人達拾数人に出合った。感激して話かけたところ、Saleri の婦人会の人々で、定期的に村の清掃に勤めているとの事であった。今回二八日間ネパールの山村を歩いたが、地元の住民自らが自分たちの村をきれいにしようと自主的に努力しているのは、この Saleri 村のみであった。

吊り橋を渡って、Budhi Gandaki の左岸の台地の村 Philim へ。この村には、新しく建設された大きな学校が建っていた。ガイドのタシ君の話では、日本の援助で出来た学校の筈との由。Salari 程ではないが、Philim も割と小ぎれいな村であった。

Sama へ向かうマナスル街道との分岐点の直ぐ上の崖の上に張り出した岩で、私達のポーターやキッチン・ボーイ達が休んでいた。私達が通り過ぎて暫くすると、後ろからキッチン・ボーイの一人が泡を食って追いかけてきた。岩の上に置いていた鍋等の炊事道具を入れた籠のドッコが、風に飛ばされて崖の下に落ちてしまったらしい。ロープを入れた荷物を担ぐ前を歩くポーターからロープを受け取って、ガイドのタシ君と二人で岩のところへ戻って行った。ガイドと、コック、キッチン・ボーイ達で、ロープを使って崖下に落ちた炊事用具を回収するのに約一時間程かかったようである。人身事故がなくて、ほっとする。

四月一五日は Lukwa にあるバッテイの前のキャンプ場に宿泊。このあたりからラリー

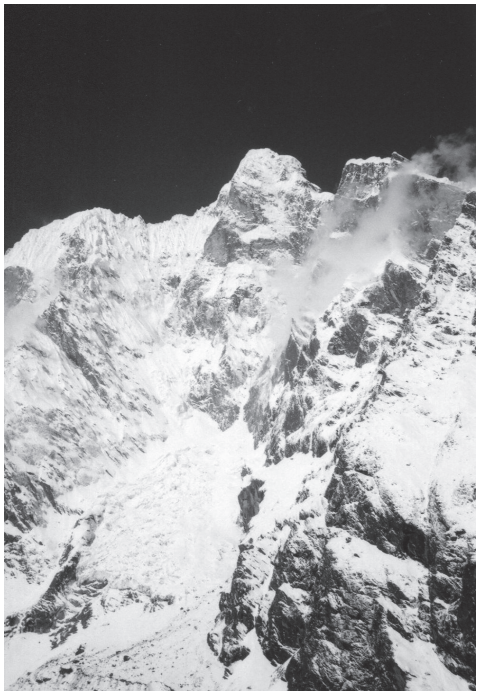
Shring Himal (7165)

グラスが咲き始めている。カトマンズを出てから一週間になるので、Lukwaで一日休養する事にした。また、この近辺から、ワラビやコゴミがふんだんに生えている。採集してゴマあえにして食べた。

Lukwaを過ぎて暫くすると、対岸の北側にShringi Himal（七一六五m）の大きな堂々とした山塊が目に飛び込んできた。主峰は一九五三年にニュージーランド隊によって初登頂されている。真っ赤なラリーグラスの向こうに聳えるShringi Himalは魅力的だ。

当初はLukwaからRipche経由でDomjeへ行く計画をしていたが、RipcheとDomje間の支谷にかけられた木の橋がかなり腐っているらしいとの噂を聞いたので、Syar Kholaに架けられた新しいワイヤーの吊り橋を渡って対岸のChumling経由でDomjeへ行くことにした。Chumlingには、新しいロッジが建っていてその前で幕営した。ロッジの裏側にはShringi Himal山塊の前山の迫力のある鋭峰P6460が聳えていた。ロッジに到着直後、ロッジ前の広場でロバが苦しみのたうち廻っており、あっけなく息を引き取ってしまった。ロバ主とロッジの主人達が、ロッジ前の深い谷のゴルジュにロバを突き落として処分する光景を目にし、命のはかなさを見せられていささかショックであった。

休息後、ロッジの裏の村へ散歩に出かけた。Syar Kholaの北側は完全にチベット文化圏で、村人は生まれて以来顔を洗った事のないような人達ばかり。薄汚い衣服をまとい真っ黒な顔をした異様な風貌なのは、Lukwaまでの村人との大きな違いである。



P6460 (Shring Himal range) from Chumling

Chumlingを出てSyar Kholaの右岸の道を一時間余歩くと、対岸の南側にガネッシュ・ヒマールの山塊が望まれた。Ganesh Himal 2（七一一八m）に連なるP6008とP6030であろうか？

Syar KholaとTorogompa Glacierとの合流点のRainjamにバッティがあるが、小屋の前にゴミ入れの大きな缶（Manasuru Conservation Projectからの支給品）が置いてあるが、この小屋の前や周囲は捨てっぱなしのゴミの山。このバッティの横にキャンプ場があるが、とても幕営する気になれない。河をわたりDomjeの医療所の横からGumba Lungdangへの道をとる。ラリーグラスの林を抜けて、約五時間の苦しい登り。三三〇〇mのGumba LungdangのGompaにようやく到着。このゴンパは、チベット仏教の尼寺で若い尼僧の修行所にもなっているようだ。本堂の他に、瞑想室と尼僧用の家が六～七軒建っており、現在一三人の尼僧が修行しているという。本堂の前に、テントを張らして貰って、四月一八日より五日間滞在した。

ゴンパの対岸の西側にGanesh Himal 2

P6250, P5893, P6060 and P6008 from left

（七一一八m）につながるP6250, P5893, P6030の三山が連なる。Ganesh Himal 1（七四二二m）は曇り空で、見えない。ガイドのタシとアシスタント・シェルパのカビラルがトロゴンパ氷河への道を偵察に出かけてくれた。彼らの帰着が遅くなり心配したが、六時過ぎになってやっと戻ってきて一心配する。上のカルカまで行ってきたとの事。

翌日四月一九日朝五時三〇分にゴンパを出発、いよいよトロゴンパ氷河に入る日だ。ゴンパからのトラバース道を一時間強歩き、谷に降りてしっかりした板の橋を渡る。トロゴンパ氷河の下流の橋で、そのうち地図に書いてある右岸の台地に渡り返すのではと思っていたが、幾ら歩いても道は森の中の急坂をドンドン上がって行くばかり。ガイドの話によると、上の方にカルカが二つあるという。Ganesh Himal 2の支尾根の下あたりになる三八〇〇mの二つ目のカルカに一〇時四五分に到着。左手に見える小山の向こうにトロゴンパ氷河があるとガイドは言うが、このカルカへの道は正規のトロゴンパ氷河道でもなく、Ganesh Himal 1のBCへの道でもなくて、単なるカルカへ通じる牧童達の道なる事がハッキリとしたので、今日の偵察はこのカルカまでで打ち切る事にして下山。ゴンパに戻って暫くすると雨とミゾレが降り出した。

ガイドもシェルパも、他に道があるはずがないと首をかしげている。英語が少し話せる賄い係のゴンパの尼僧によると、彼女がこのゴンパにきてから丸六年たつが、これまで登山隊もトレッカーも誰もきた事がないと言う。しかし、トロゴンパ氷河の内院にあるカルカの小屋にはヤクの放牧に行く人がいるので、しっかりした道はついている筈とのこと。

四月二〇日に、ガイドとシェルパの二人を偵察に派遣。トロゴンパ氷河の右岸のモレーンの中に絶対正規の立派な道があるはずと説得し、前日渡った橋を渡らずに、その手前にある道を見つけトロゴンパ氷河の右岸のモレーンの中の道を探すように指示した。

この日の朝は、Ganesh Himal 1, Ganesh Himal 2他トロゴンパ氷河内院の山々が朝焼けに輝き、ヒマルチュリからマナスルまでの連山を望むことが出来る最高の天気であった。私達メンバーは休養日とし、写真を撮ったり洗濯をしたりして一日のんびり過ごした。

五時に出発した二人は、昼前にゴンパに戻ってきた。今度は間違いなくトロゴンパ氷河に入って、内院の三九〇〇mにあるカルカまで行ってきたとの事。ただし、カルカの近くには水が全くない由。その下の三七〇〇mにも良いテント地があるが、ここもチョロチョロ流れる程度の水流で、いつ水が止まるか解らない状態との事。明日からの予定をどうしたら良いか、ガイドも頭を痛めている様子。検討の結果、私達メンバー三人と、ガイドとシェルパの合計五人が三七〇〇mのABCに上がり宿泊。テント、寝袋、食料及び二〇リッターの水タンク等を三人のシェルパに荷揚げさせる事にした。

尼さん達がゴンパの前での昼食が終わった後、年配の尼僧の許可を得て、私達の明日からのトロゴンパ氷河入りの成功を祈願して八太氏と私の二人で般若心経を唱えさせていただいた。言葉は解らないだろうけど、私達が般若心経を唱え終わったら尼さん達が大きな拍手をしてくれた。尼さん達との垣根が一つとれたような気がした。

四月二一日、曇り空だが朝五時四〇分にゴンパを出発。三五分歩いたところで、森の中の道をそのまま河に向かって下らず、左手にあるしっかりしたトラバース道をとる。三〇分ほど歩いて支沢に降り立ち、ポーターが二〇リッターのポリタンに水を満タンにした。　巨木の多いモレーンの森の中を歩く。Roktaという桜の花に似た野生の三椏の花が丁度満開だ。一九七三年に、製紙用原料としてのRoktaの買い付けに、ネパールの山村をあちこち歩きまわったことを懐かしく思い出した。八時五〇分に板木のしっかりした橋を渡り、暫く登って行くと、森の中から突然抜けだし、広々としたカルカ状の台地に出た。一〇時一〇分、台地の奥が少し盆地になっていて、小さな小川が流れているところにテントを張ることにした。標高三七〇〇mの我々のABCである。荷物をデポしたポーター三人は、折り返し、ゴンパへ帰って行った。

テントを設営し、ゆっくりと昼食をとった後、私達三人は午後三時までに帰幕する予定で一二時四五分に上部を偵察すべく出発した。ABCの上へ一段登ったところにカルカがあり、牧童の小屋掛け用の石組みが二軒あ

り。Ganesh Himal 1のBCになったのではと思われる幕営地に適した四〇〇〇mの地点に一四時二〇分に到着し、この日の行動はここで打ち切ることにした。天候はあまり芳しくなく、曇り空で山の景色はあまり見えなかった。

一五時一〇分にABCに帰着すると雨がパラパラと降り出し、夕方より雨が小雪に変わった。日本人三人の我々メンバーは、三～四人用のノースフェースのテントで、EPIガスを使って自炊。アルファ米の五目飯、高野豆腐、塩昆布、味噌汁の久しぶりの日本食を味わった。雪は未だ降っており、明日の午前中は是非晴れて欲しいと祈るような気持ちで、夕食後直ぐに就寝した。

West face of Ganesh Himal 1

夜半に雪が止み、月が出だした。四月二二日午前四時起床。私達の般若心経の読経の効果があったのか、快晴のさわやかな朝だ。ABCを五時二〇分に出発。

Ganesh Himal 1（七四二二m）は、左手に頭の上から覆い被さるように聳えている。三九〇〇mのカルカを過ぎ、Ganesh Himal 1のBCになったと思われる地点から眺めるGanesh Himal 1の西壁は、岩と氷の急峻な壁だ。一九五四年にマナスルより転進した日本山岳会第二次マナスル遠征隊（掘田弥一隊長）が、トロゴンパ氷河側から挑戦したが六三〇〇mで敗退。当時の貧弱な装備でよくもこの西壁に取り付いたものだと感嘆した。翌年一九五五年に、フランス・スイス合同隊により東面のサンジェ氷河側から初登頂された。トロゴンパ氷河側からは、一九八五年に韓国・ネパール合同隊、一九八六年にスイス隊がGanesh Himal 1に挑戦したがいずれも敗退。その後トロゴンパ氷河側から登頂した隊があるのだろうか？

トロゴンパ氷河の突き当たりになる最奥にはピラミッド型のP6863が聳える。トロゴンパ氷河側は、なぎ落ちるような壁になっていて、登路は簡単に見つかりそうにない。未だ未踏峰として残っているのであろうか？

P6863の左手にP6872が頭を覗かせていて、その更に左（東）にGanesh Himal 3（七〇四三m）が覗いている。Ganesh Himal 3は、一九七九年秋に岡山大学山岳会・ネパール合同登山隊がチリメ・コーラ側より初登頂した山だ。

トロゴンパ氷河内院の中央には、Ganesh Himal 4（七一〇四m）、別名Pabilがどっしりと聳えている。翼を広げた鳳のような貫禄のある山である。一九七八年吉尾弘隊長率いる日本勤労者山岳連盟・ネパール警察合同隊が、南面のアンク・コーラ側から初登頂しているが、トロゴンパ側は人を寄せ付けないような厳しい氷壁だ。

U字型になったトロゴンパ氷河内院の一番右（西）には、修行僧のような容姿のGanesh Himal 2（七一一八m）が聳える。岩

P6863 and Ganesh Himal 4 (7104) from left

Ganesh Himal 6 (6908) and Ganesh Himal 2 (7118) from left

峰の素晴らしい山だ。一九八一年にトロゴンパ氷河側から、西ドイツ・ネパール合同隊と九州歯科大学隊が同じ一〇月一六日に初登頂している。

Ganesh Himal 6（六九〇八m）は、Ganesh Himal 2に隠れてなかなか見えなかったが、モレーンの一番奥の約四二〇〇m近辺まで登って、ようやくその姿をはっきりと捕らえることが出来た。Ganesh Himal 2に隠れていて、あまり目立たない山だったようだ。Ganesh Himal 6が既にどこかの遠征隊によって初登頂されたのかどうかは、不勉強のため不明。

下流の北面を振り返ると、Shringi Himal（七一六五m）から東に連なるネパール・中国国境の山々の一番東側にGangpengqing（七二九二m＝カンペンチン）が望まれた。カンペンチンは、一九八一年にAACK（京都大学学士山岳会）が初登頂した山だ。まさかトロゴンパ氷河からカンペンチンが望めるとは予想もしていなかっただけに感激は大きかった。

From left, Langpo (6648) and Gangpengqing (7292) at Nakyu

自分の足でトロゴンパ氷河内院に入り、全ての山々をこの目で見ることが出来て三人とも大満足。トロゴンパ氷河への道が見つからなかったり、天候が悪かったりして、期待していたガネッシュ・ヒマールの山々を全て見ることが出来ないのではと、半分あきらめかけていただけに、その喜びはひとしおであった。一一時に三七〇〇mのABCに帰着。ポーター達が既に撤収のために登ってきてくれていた。昼食後、テントを撤収して下山。

ゴンパに帰着する一五時頃から空が曇りだし、夕方より雨が降り出して、雪に変わった。今日は、私達にとって本当にラッキーな一日であった。

四月二四日に、トロゴンパ氷河に別れを告げ、ゴンパから下山。帰路、Tsum ValleyのRachhen Gompaまで足を延ばす積もりだったが、手前のNakyuまでとした。Nakyuの村から、Langpo（六六四八m）の後ろに頭を出しているカンペンチンを見ることが出来た。

翌日NakyuからChumling経由で四月二五日にPhilimに滞在。私の七一歳の誕生日を祝って、宮川・八太両氏がポケット・マネーでロキシーとジュース等を買って、トレッキング・スタッフ全員を招待しての大パーティを催してくれた。ポーターやキッチン・スタッフとレサム・フィリリを唱い、手を取り合って踊った素晴らしく楽しい誕生日だった。

翌四月二六日にDobhanに移動。ここから後半のガネッシュ・ヒマール南面の九日間のトレッキングのスタートだ。Dobhanの吊り橋の手前のバッテイの裏から、急な畑の中の道を登り尾根を西の方へ巻いてKeranjeへ出るのだが、ゴルジュ帯の大障壁のトラバースや急坂の下降路が続き、足を滑らせばあの世

行きという気の抜けない緊張が続く道だった。当初の計画では、Dhunchet まで足を延ばし、翌日に Nauban Kharka から Managi Bhanjyang 経由で Borang に行く計画を立てていたが、Dhunchet から Borang までは一日の行程としては長すぎるとのガイドのアドヴァイスがあり、次の村の Kashigaon に幕営した。翌日は Dhunchet に宿泊せず、Nauban Kharka に泊まって、Dohban から四日かけて Borang に行く計画に変更した。

四月二九日に Dhunchet に午後一二時半に到着したが、村の女性達が Nauban Kharka にその日のうちに行くのは、無理だとの茶々をいれたり、Nauban Kharka とは全く関係ない他のカルカへの道をガイドやシェルパに教えてしまったので、ガイドは混乱してしまった。尾根を真っ直ぐ登れば Nauban Kharka に行き着く筈なのに、どんどんトラバースを続けてしまい、森の中へ入ってしまった。雨が降り始め、現在地も不確かで、その日のうちに Nauban Kharka に行き着ける公算が少なく、下手をすると事故の元になると判断。午後四時に森の中のやや平らな地を見つけだし、急遽テントを張って幕営することにした。

四月三〇日、雨の中を六時四〇分に出発。現在地が解らないのに、ガイド、シェルパ、ポーターが、てんでバラバラに道を探して行動しはじめたので、危険性が大きいと判断して、「全員一緒に行動すること。勝手に先に行くことは厳禁」との隊長命令をだした。

高い木の生い茂るジャングルのような森の中を、ヤクの放牧道か山仕事の道か判別出来ない踏み跡をトラバース気味に登り続けた。カルカを三つ過ぎ、一二時過ぎに四つ目のカルカで、牧夫とその家族に出合った。この地点から Nauban Kharka に行くのは不可能との話。Boran には一日では行けず、次の部落の「リー」で一泊してからしか行けないとの事。

現在地が解らないので、お金を払うので、次の集落の「リー」まで案内して欲しいとガイドを通じて交渉し、牧夫の了解を得た。「リー」へ越える峠（三一三〇m）に午後三時到着。自宅のあるカルカに戻る牧夫は、この峠から戻って行った。山仕事にきているらしい二人連れの男性に出合い、峠の名前を聞いたら「Kuti」との事。峠から少し下ると、ラリグラスとチマールの素晴らしい石楠花の庭園に出くわした。転がり落ちそうな急坂の道をドンドン降りて行くも、「リー」の集落はなかなか近づかず、結局集落にある学校の校庭のテント場に着いたのは一九時だった。

翌朝、集落の男性三人がテント場にやってきたので、地図を示して質問。この集落は「リー」とも言うが地図上に記載されている「Rigau」だとの説明。心配していた通り、Nauban Kharka より遙か南に来すぎていることが判明。どうも、Dhunchet の村人の無責任な情報に騙されて、Dhunche Khola 沿いに南へトラバースして、Boran の翌日の訪れる予定だった Kuri の対岸（Ankhu Khola をはさみ）の村へ来てしまった事が判明。言葉が解らないので、ガイドとシェルパまかせにして Dhunchet の村人からの情報を収集した事を深く反省。事故がなかって良かったが、誠に恥ずかしい道迷いであった。

Rigau からいったん Ankhu Khola まで一〇〇〇m程降りて、又同じだけ登りなおし五月一日は Kuri に宿泊。Kuri の村にはこれまでトレッカーが全く訪れていないためか、子供達が幕営地にたちまち集まって来た。珍しいのか、隊員用のテントやキッチン・テント、ダイニング・テントを覗くものと、もの凄い人だかりとなった。子供が大半だが、七〇～八〇人も集まって来ただろうか。その晩は夜一一時半に、日蓮宗のように鐘と太鼓を叩いてテント地までやってくる者、早朝一時半頃に懐中電灯で各テントを照らし覗きに来る二～三人の男などがあり、一晩中ゆっくりとまともに寝られなかった。

五月一日も二日も、天候が思わしくなくガネッシュ・ヒマールの山々は霞んでしまい、残念ながらガネッシュ・ヒマール南面の鮮明な写真は余り撮れなかった。

Kuri から Kimtang 迄は明るく開けた畑地がつづく気持ちの良い農村風景。Kimtang の上村を過ぎると、突然車道が現れ驚かされる。Kimtang から Deurali までは、約四時間の車道歩き。Deurali から Trisuli Bazar 迄も、約四時間の車道歩きで五月四日の一〇時過ぎに到着。町から少し離れた、Trisuli Khola 近くの林の中で幕営した。Dohban か

らTrisuli Bazarまで八日間かけて歩いたが、この間トレッカーには全く出合わなかった。私達だけの静かな山歩きであった。

五月六日にカトマンズから迎えの車が来ることになっているので、五日は休養日とした。シャブルベンシの近くの村が出身地のポーター達は五日朝に自宅へ帰る事になり、四日の夜は私達で「お別れパーティ」を催した。ネパールの唄と踊りの楽しい一夕であった。全員が良く働く気持ちの良いスタッフ達に恵まれた素晴らしいチーム・ワークの隊であった。ほぼ計画通り完踏出来た充実した楽しい山歩きであり、大変嬉しい大満足の山旅であった。

魅力的なガネッシュ・ヒマールの鋭峰に、日本の若いクライマーが訪れてくれることを期待したい。

# 大興安嶺探検のマル秘「報告書」と再訪の旅

斎藤清明

太平洋戦争中の一九四二年におこなわれた「北部大興安嶺探検」（今西錦司隊長）は、十年後に『大興安嶺探検』（毎日新聞社刊。一九九一年に朝日文庫）が世に出て、世界的な地理学的探検の成果として知られる。吉良龍夫、梅棹忠夫、川喜田二郎、藤田和夫ら学生たちが主力であった同隊の公式報告書は、「輝ける青春の記録文学」と評され、戦後の大学探検部誕生もうながした。

この探検は軍部の協力を得て行われたもので、探検直後の満州国治安部へのマル秘「報告書」が、今年三月から六月にかけて民博で開催の「ウメサオタダオ展」に展示された。これまで明らかでなかったその「大興安嶺調査隊報告書」の内容と、今夏に訪れた大興安嶺の現状を紹介したい。

## 大興安嶺探検

太平洋戦争開戦から半年後の一九四二年五月から七月にかけて、京都帝国大学講師・理学博士の今西が隊長をつとめる「大興安嶺探検隊」は、中国東北地方（当時の満州国）の北部大興安嶺の縦断に成功した。ミッドウェー海戦は、この探検の最中のこと。

タイガと呼ばれる樹海が広がる森林地帯を、地図の緯度にして三度半、約一〇〇〇キロの行程だった。本隊は今西隊長ら九名、地図の空白地帯に挑む支隊は川喜田二郎支隊長ら四名、補給にあたる漠河隊は森下正明副隊長ら八名で構成されていた。南からの今西たち本隊は、ロシア人のコサック馬を輸送にもちいて北上し、支隊も同行。北からは森下たちの漠河隊がトナカイを率いて南下した。

両隊は天測で位置を確かめながら、無線交信で連絡をとりつつ距離を縮めていった。支隊は途中で本隊と分かれ、ビストラヤ川源流の北部大興安嶺分水界の地図の白色地帯を突破。やがて、三隊はあらかじめ決めておいた地点で合流する。そして、全隊員が漠河隊のルートを戻り、アムール川の漠河に至って、探検を終えた。

隊の主力は学生たち。隊長の今西錦司、副隊長の森下正明（京大農学部副手）を除く一九名のうち一〇名までもが京都の学生で、他は満州国で加わった軍の無線技師と測量士、満州国政府の医官、満州航空社員、警察官。

学生たちは、京都での計画立案から隊の中心になって活動してきた、吉良龍夫（京大農学部）、梅棹忠夫（京大理学部）、藤田和夫（同）、川喜田二郎（京大文学部）、伴豊（同）、土倉九三（京都高等蚕糸学校）、江原真之（同）、加藤醇三（同）、小川武（大阪商科大）、川添宣行（立命館大）である。

そして、この学術探検の成功は、今西や森下（動物生態学）、吉良（植物生態学）、川喜田（文化人類学）、梅棹（民族学）、藤田（地質学）らの、戦後の活躍につながっていく。

## 戦後に『大興安嶺探検』刊行

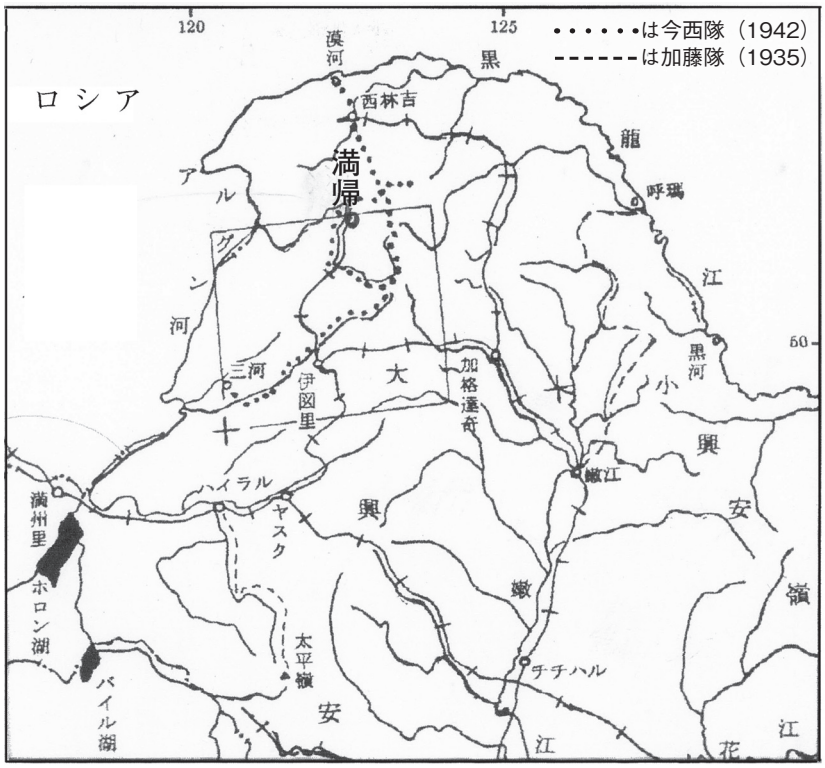
探検から十年後の一九五二年、報告書として今西錦司編『大興安嶺探検　一九四二年探検隊報告』（毎日新聞社）が刊行された。文部省の学術成果刊行助成金を得て、当時としては内容・装丁ともに立派なもの。また、米国の地理学雑誌『Geographical Review』(vol.40 1950) に、今西が英文での学術的成果を発表。

戦後になってからの探検隊の成果の公刊。さらに、一九五五年の「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」に始まる「探検大

学」といわれる京都のフィールド科学における華々しい活動、探検部の創立（一九五六）などがあって、大興安嶺探検はその原点として評価される。

『大興安嶺探検』はその後、一九七〇年に文芸春秋社『現代の冒険』シリーズに一部が収録され、一九七五年には完全復刻版が講談社から出る。一九九一年には朝日文庫に収録。この朝日文庫版には『大興安嶺探検』の後半九八頁を占める学術報告と索引が省略されているが、本多勝一による解説「輝ける青春の記録文学」がある。本多は「開拓者精神」「ロマンチシズム」「奇妙な『非国民』たち」「人生最良のとき」「仮説と創造」「『大興安嶺』を超えて」と章立てし、五〇頁にわたって執筆。「私たちの探検部誕生をうながすための身近なバイブル」「（探検の）手本だった」と記す。

大興安嶺地域の水系図




（市原実「ナプタルダイ登山記」より引用）

## 軍部との関係

大興安嶺探検には軍部の許可が必要で、その協力が不可欠であったことは、『大興安嶺探検』に記されている。軍部との交渉の様子も載っている。しかし、軍部にどのような報告をしたのかなど、その後の軍部との関係についてはわからない。

今西は『大興安嶺探検』の序で、「戦争はたけなわであった。えらい学者たちが、われもわれもと軍に便乗して、右往左往している。それを嘲るかのごとく、大興安嶺の学生は、軍を乗りこえ、軍のまもりの外に、自由の天地を求めていった」と記す。

第一章の「探検の前夜」では、「国境にとらわれない、自由な眼でながめれば、つまり北部大興安嶺は、東シベリア山地の一部なのである。ひろいシベリアのなかには、このくらいの大きさの未開地は、あちらこちらにあるだろう。そのひとつが偶然にもとじられた国境のこちらがわにあった。しかも、軍事行動をゆるさない密林と湿地のおかげで、一九四二年当時にも、一種の空白地帯として、国境の緊張から解放されていた。この偶然がさいわいして、われわれは、そのなかにもぐりこんでおもうままにふるまい、シベリアの自然に接することができた」。続けて、「しかし、いまとなってみると、それはまことにみじかいチャンスであった。いまでは、満州は事実上のシベリアの一部となり、北部大興安嶺は、手のとどかない鉄のカーテンのむこうにかくれてしまった」と結ぶ。

もし、戦中に報告書が公刊されていたならば、軍部との関係が記されただろう。じっさい、『大興安嶺探検誌』として校了まぎわまで進んでいた。しかし、印刷にかかる直前に東京で空襲にあい、原稿と組版の一切が焼失してしまった。一九五二年刊行の『大興安嶺探検』は戦後に、吉良の尽力により最初から改めて執筆された。その意味でたいへんな労作である。しかし、探検から刊行までに十年近い歳月が経過しているので、探検時の今西たちと軍との関係を読み取りにくい。

## 満州国治安部への報告書

さて、探検直後の今西錦司編『大興安嶺調査隊報告書』は、今西錦司生誕一〇〇年を記念する京都大学総合博物館での特別企画展「今西錦司の世界」（二〇〇一年一二月～翌年四月）の際に、『大興安嶺探検』の実質的な執筆・編集者の吉良が、「今西さんから預かっていた」と同展に提供された。報告書表紙の裏には赤鉛筆でマル秘と記されている。今西の筆跡である。

謄写版刷り、A4版二六八頁。折りたたみ地図（オロチョン移動分布図）が付いている。隊員名簿、「康徳九年」、「編輯　今西錦司」が冒頭にあって、報告本文が続く。後記は「昭和一七年一二月二日　今西錦司記」。「帰学後四ヶ月余りにして、ここに漸く報告書を完成した」とあり、探検後にその年末までに作成、満州国治安部に提出したものとみられる。

内容は、第一部「探検小史　行動」（執筆担当者、梅棹忠夫）、第二部「地形　地誌」（同、藤田和夫）、第三部「気象　植生」（同、川喜田二郎）、第四部「民族」（同、小川武）、「後記」（同、今西錦司）となっている。

今西の「後記」は、この隊を「治安部大興安嶺調査隊」と称し、その成立経過を次のように記す。

大興安嶺の最高峰一七二八メートル峰に昭和一一年一月、京都帝国大学旅行部員（隊長加藤泰安・現在陸軍中尉山西省特務機関勤務）が登頂成功後は北部大興安嶺が目標となり、縦断が計画されたが、シナ事変のために実現の機を得ずに数年を経た。

「しかるにたまたま本計画は国防科学研究所において認められるところとなり、所員を派してこれが実施に当たらしめるにつき、同研究所委員長栗田義典氏は昭和一七年二月渡満、満州国治安部高級顧問藤村謙少将に向ふところがあった。これよりさき一二月末、学生川喜田、伴の二君具体案を携って渡満し、三月には可児藤吉君らが渡満せる結果、本計画は治安部が主体となり、国防科学研究所員は委嘱されて調査任務に従事すべきことが略略決定した」

ここに、国防科学研究所という、『大興安嶺探検』には登場しない組織名が登場する。今西たちはその所員として治安部から委嘱され、調査任務という名目で探検を行ったというのである。そして、「後記」は「本調査隊の母胎となった国防科学研究所の栗田義典・奥平定世・国本朝太郎の三氏に厚く感謝する次第である」と結ぶ。

国防科学研究所は大阪の商人たちが中心になってつくられ、大阪商大教授の奥平（京都一中で今西と同級）から、今西に京都支部長をとの話がもちこまれたという。さらに、今西は次のように記す。

「調査隊に與えられた任務としての兵用地誌に関しては、従来の経験に乏しいため、期待に背き概ね掻靴の感無きを得ないと思はれる。よってこの部分は調査隊に参加された陸地測量部の松本、佐藤二技手の専門的な報告書と併せ読まれんことをお願いしたい。憂慮されたるにも拘わらず、学生のみを以て組織せる支隊が、無事空白地帯を突破して、簡単午ら実測図を作製し得たことは、この間にあって、いささか本調査隊の面目を施したものとしなければならない」

学術的調査については、「この報告書を以て一つの中間報告と見なし、他日稿を改めて純学術的報告書を上梓する意図を有するものなることを諒とせられたいのである」。そして、「とにかく計画の作製、現地交渉、先発隊員としての諸準備はじめ、行動期間中の諸資料の聚集より、帰学后の整理に至るまで、殆どその大部分は隊員として参加せる学生自身の積極的行為に待つものであった。本報告書の原稿もまたかくして彼ら自らの手になるものである。経験の不足乃至は学問的水準の低さより来たる不備はまことに已むを得ない。思ふにこの不備を覚悟の上で乗り切った、彼等の烈々たる挺身的意欲の中にこそ本調査隊を貫く開拓者精神は躍如としているのである」

## 軍を越えて学術探検

このように今西は、隊のスポンサー（費用二五〇〇〇円受けた）である満州国治安部への報告書を、謄写版刷りの質素な体裁だが、探検を終えた四ヶ月後に作成した。隊の行動の記述は軍隊の行進報告にならったものだが、その他の記述は学術的な報告となっている。すべて学生たちに分担執筆させた。

今西の「後記」は、隊に与えられた任務の兵用地誌は期待に背き、隊に同行した軍の測量技手の報告と併せ読むようにと記す。その一方で、学生たちが空白地帯を突破したことを誇っている。学生たちが、この隊の準備か

ら報告書づくりまでおこなったと、その活躍ぶりを強調する。

この報告書によって今西たちと軍部との関係が、明らかになった。軍部からの与えられた任務は、兵用地誌の作製だった。しかし、任務はあったものの、兵用地誌についてはそれほど調査はできていない。付図のオロチョン移動分布図は、兵用地誌には役立つかもしれないが、軍事的には重要なものではないだろう。隊の行進についての記述は、軍隊の報告書の体裁に整えただけという感は否めない。

それよりも、今西はこれから純学術的報告書を作ることを明言し、それについての諒解を求めている。この自信というべき、自分たちは学術探検隊であるという姿勢にこそ、今西の真骨頂が示されている。

今西は軍部への報告書においても学術報告を前面に打ち出し、しかも立派なものを後日作るという。そして十年後、戦後に出した『大興安嶺探検』では、「調査隊」を名称は用いず、すべて「探検」で通した学術報告書としたのである。その上、満州国治安部から調査を請け負って隊を派遣した（かたちにした）国防科学研究所にはまったく触れていない。まるで、満州国が消滅したように。

この報告書は吉良さんが今西さんから預かっていた。公式報告書執筆の参考にせよとのことだったのだろうか。私が吉良さんから託された際に、もっといきさつなりを聞いておけばよかったのだが、七月一九日、私が大興安嶺の旅から帰った翌週に訃報。今西さんは既になく、藤田、川喜田、梅棹さんもここ数年来相次いで去られ、吉良さんは探検隊の殿となって旅立たれた。

梅棹さんにも、担当された部分もあるので、亡くなられる半年ほど前に「吉良さんがこんなの持ってました。行動記録を執筆してますね」と尋ねると、「覚えてないなあ」とのことだった。

## 再訪の旅

大興安嶺の山中には、新中国の成立後、一九五〇年代から森林資源の開発のために鉄道が敷設された。内モンゴル自治区ハイラルの近くの牙克石（ヤクシ）から、北へ四四一キロ、満帰（マンコイ）まで。探検隊のコースと交差、並行して走り、満帰は三隊の合流地（基地）に近い。これを利用して今夏（二〇一一年七月四日～一三日）、大興安嶺探検隊の跡をたどった。

まず、ハイラルはホロンバイル草原にある。ヤクシから次第に山中へ。根河で探検隊コースと交差するが、大きな町ができていた。ガン河域からゆるやかな山越えしてビストラヤ流域に入って再び本隊コースと出会う。早朝のハイラル始発が夜に入り、満帰で終点。マンコイ川との合流地に町ができていた。高台から山並みと流域が一望でき、本隊と支隊のコースが手に取るようにわかり、オーコリドイ（一五三〇m）も見えた。お花畑に蝶が舞い、川辺林にも入って隊の行跡をしのぶ。満帰からバスで漠河へ。黒竜江省に入ると地道になり、林間を抜けて四時間で到達。さらにアムールの川岸へ。ハルピンに戻り、長春へ。かっての満州国の首都で治安部の壮大な旧址を訪ねた。

## 日記風に記すと

七月四日　関空発アジアナ航空でソウル（仁川）乗り継ぎ、ハルピン着。夜、満州里行き列車に乗る。

五日　四時四〇分 興安嶺駅を通過。ホロンバイル草原にかかると、風力発電の風車がズラリと並ぶ。一〇時、満州里駅着。国境の町はロシア語看板があふれ、観光客が多い。

六日　ハイラルに列車で戻る。一九三五年に加藤泰安さんら降り立って以来、幾たびか学生たちが expedision の出発地にしたところ。

七日　七：三二 ハイラル発満帰行に乗る。八両編成で軟座なし。最後尾の寝台を取るが、核心部を通るから寝ておられない。牙克石九：一五―二〇 乗客増える。列車は北に向かい、緑の山に入っていく。材木を満載した貨車とすれちがう。沿線に沼地が目立ち、お花畑も。一二：五〇 トンネル抜けてイトウリ流域へ。シラカバがふえ、やがて一面にカラマツ林、まさに樹海。開拓地もポツンとある。山中の「嶺南」で停車、乗務員も野いちご摘み。一三：四〇 伊図里　たくさん下車。大きな町。一四：一〇―三〇 伊図里河　さらに大きな町。すぐ西へ、線路が分かれ、道路が側を走る。沿線にチョウが舞う。お花畑の赤いのはエゾスカシユリか。根河 一五：一五―三〇 だだっ広い町。橋がかかる。こ

満帰から北へ流れるビストラヤ本流。
本隊がたどったコース

こから上流へ、探検隊は向かっていったのだ。かっては大興安嶺のまっただ中の無人の地が、今や開拓の中心地となっている。古い開拓農家が朽ち、新しい原色の住宅が建ち並ぶ。

線路はさらに北へ、水系をゆるやかに越えていく。探検隊と次に出会うのはビストラヤ本流だ。金林 一六：四五 本流の右岸に出たはずだが、流れは見えず、川辺林が広がる。金河 一七：三〇 細い材木を積んだ貨車が停まっている。貯木場もあり、かなり伐採しているようだ。もう探検隊と併走しているはずで、オーコドリイが見えないかと車窓から目をこらす。本流が木立の間に、蛇行してゆったり流れる。山麓に霧がわき、陽が傾いた、二〇：三〇 満帰。

満帰の町から南望
左奥にオーコドリイがかすかに見える

八日　満帰に滞在。高台（八三二・五m）に登ると、すばらしい展望。町から山、川まで一望でき、大興安嶺の山なみを堪能した。南に遠く、先が尖って高くて風格あるのはオーコドリイだ。今西さんらは若かったから、夜討ちかけて仕留めたのだった。マンクイ川上流域もよく見える。当時は地図の空白地で、川喜田さんらの支隊が突破したのだった。北に向かうビストラヤ本流はやがて東に転じるが、本隊はしばらくは右岸に沿って下ったのち、森下隊との合流地に向かったのだ。高台からの下り、お花畑を楽しみ、チョウを追った。これらの生き物たちは探検時と変わらないはず。三輪車タクシーをチャーターし、川べりを走った。本流は広く、ゆたかな水量。岸辺に降り立つと、小さな虫にまとわりつかれた。さらにマンクイ川上流に向かおうとしたが、パンク。夕食は奮発して細鱗魚という川魚を注文した。今西さんが釣ったタイメンかもしれない。うまかった。

九日　漠河行バスは一日一便。八：〇五出発。ほぼ満員。漠河まで一三〇キロ。エベンキ族村前を通過し、九時に省境。舗装がなくなりガタガタの地道。尻が痛くなる。単調な明るい森の中を走る。対向車ほとんどなし。正午、漠河（チーリン）着。さらにアムール川の河岸まで八八キロ、タクシーで。工事中の舗装された道をぶっ飛ばす。なんと、北極村という観光地になっていた。ついに大興安嶺こえてアムールに来た。

一〇日(日)　大興安嶺純野生木耳やブルーベリーを土産に、空路、漠河からハルピンへ。北京から週末利用の「北極村」観光客などで満員。漠河古蓮机場一五：四〇発　ハルピン一七：二〇着。アムールは見えず、緑の樹海のみ。

一一日　ハルピンから列車で長春へ。駅正面の春誼賓館（旧ヤマトホテル）は改修中。満州国の遺跡めぐり。探検隊のスポンサーだった治安部（一九四三年から軍事部と改称）を見つけた。その旧址は、吉林大学第一院という大病院となっていた。建物はほぼそのままで、患者があふれ、立派に使われていた。

一二日　ラストエンペラーのいた偽満皇宮博物館を訪ねた後、ハルピンに戻る。

一三日　ハルピンからアジアナ航空で関空帰着

# 人の生老病死と高所環境

## ―「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応

総合地球環境学研究所　奥宮清人

地球研、高所プロジェクトは、AACKのこれまでのメンバーの方のご功績と歴史、および、現メンバーの方の多大なご支援によって、成り立ってきた。これまでの成果をご報告し、御礼に代えたい。

### 一、目的と背景

高地で人はいかに生存し生活しているのか（生老病死）という問いに対し新たな視点を切り拓く。地球規模で進行する高齢化とそれに伴う生活習慣病を「身体に刻み込まれた地球環境問題」と考え、ここに焦点をあてる。高地環境に対する人間の医学生理的適応と「高地文明」とも呼びうる生態・文化的適応を把握し、近年の生活様式の変化がいかに高所住民のQuality of life（QOL）に影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的としている。

高所環境は低酸素、寒冷、脆弱な生態系という厳しい環境である一方、高度差による生態学的多様性がある。低温、乾燥性ゆえに、感染症を免れるという有利な側面もある。チベットと世界の他の高地では、多血症、血流増加、血液酸素濃度増加、肺活量増加といった、低酸素に対する適応戦略が異なることが知られている。エチオピア人は、一〇万年前より高地に上がり、チベット人は二―三万年前より、アンデス高所住民は、最も遅い、一万三千年前よりの高地適応の進化的な期間の違いがあるからである。チベットの高所住民は血流を増やすことにより、アンデスでは低地人と同様に、ヘモグロビンを増やすことにより、エチオピアでは、酸素濃度を上げることにより適応してきた。その違いが、生活習慣病や老化の現れ方にどう違うかを明らかにすることは、老化と老年病のメカニズムを解明し、予防につなげることにつながるかもしれない。

生活習慣病や高齢者の割合は世界的規模で増加しており、高地の厳しい環境における老化と疾病を明らかにする必要がある。なぜなら、高地では、密接な人間―自然作用環があり、生活様式が今まさに急激な変化を来たしているからである。低酸素に対する適応戦略の違いが、生活習慣病や老化の促進にどう影響しているかを調べることは新しい視点である。

チベット高原の歴史を考えると、およそ二―三万年前、人類はチベット高原に移住し始め、低酸素への医学生理的適応が始まり、およそ一四〇〇年前、吐蕃王朝が成立し、チベット文明は始まった。人々は、厳しい環境に対し、文化的適応を通じて克服し、文明を形成した。そして、チベット動乱後五〇年、チベット文明は急激な変容を遂げてきた。我々はこれらの三つのタイムスケールを念頭におきながら、この数十年の変化に焦点をあてる。チベット文明における文化的適応の特徴として、固有の栽培植物、動物の家畜化、持続的な農牧複合の形成、異なる生態系をつなぐ交易ネットワークなどがある。しかし、チベット文明の変容がまさに今起きている。

地球規模で進行する高齢化とそれに伴う生活習慣病を「身体に刻み込まれた地球環境問題」ととらえる。高所環境では、低酸素への医学生理学的適応は続いているが、文化的適応は今まさに変化している。高地文明は、高度差による生態の多様性を生かした、賢明なる資源利用を特徴としてきた。長年かけて培われた高地への適応と近年の急激な生活様式の変化がどのように影響しあうのかを明らかにし、高地文明の未来可能性を「老人智」に学びながら、環境負荷の少ないライフスタイルや、高地の人々の幸せな老いとよりよいQOLを追求し、自然と文化の多様性を生かしたグローバリゼーションとの「共生智：ともいきの智恵」を考える。さらに、我々のライフスタイルや老人のケア、中山間地の問題に逆照射できるようにつなげたい。

### 二、課題と方法

調査地域は、中国・青海省、インド・ラダーク、アルナーチャルに、ブータン・カリンを加え、⑴⑵とともに、⑶の未来設計課題を最近加えた。

⑴人は高地環境に対していかに医学生理的、生態・文化的に適応してきたのか。

⑵高地における生活習慣病の広がりと、その背景としての生活様式や環境の変化が老人のQuality of lifeへ及ぼす影響はいかなる

ものか。

(3)高地住民（特に高齢者）のゆたかなQOLのための、ヘルスケア・デザインがいかにあるべきか。

四七名のプロジェクトメンバーにより組織され、現地カウンターパートと協力して調査を進めている。手法によって医学班、文化班、生態班の三つの班を組織し以下の課題に取り組んでいる。

(1)医学班：生活習慣病に焦点をあてた健診に加え、低酸素適応、Quality of life等の評価などを担当する。

(2)文化班：生活習慣病の原因となりうる文化的因子、高地環境への文化的適応法、生活様式の変化、老人の価値観、経済状態などの調査を担当する。

(3)生態班：生活習慣病の原因となりうる生態学的因子、環境変化に関する老人への聞き取り、既存の客観的データの入手及び現地での観測を担当する。

さらに対象地域として、以下のように組織する。

(1)ラダーク グループ：LEDeG（Ladakh Ecological Development Group）、LIP（Ladakh Institute of Prevention）をカウンターパートとして調査を行う。

(2)アルナーチャルグループ：ラジブガンジー大学環境科学部をカウンターパートとし調査を行う。

(3)青海省グループ：青海大学付属医院をカウンターパートとして調査を行なう。

(4)ブータングループ：ブータン保健省をカウンターパートとし、現地長期滞在、フォローアップ調査を行う。

## 三、成果

### 高地への医学生理的適応の影響

進化的高所適応に違いのある、海晏（三〇〇〇m）のチベット人と漢人を比較することにより、進化的適応の比較的浅い漢人において、ヘモグロビン増加と生活習慣病や老化の促進が明らかとなった。ラダークのチベット人（三八〇〇m）においても、低酸素によりヘモグロビン増加（多血症）で代償した群において、血糖の増加（糖尿病および予備群を含む）を認めた。

### 高地への生態・文化的適応とグローバル化による生活様式の変化

異なる生態を代表する「森のチベット」：アルナーチャル、ブータン、「オアシスのチベット」：ラダーク、「草原のチベット」：青海の高地文明の基本要素である生業と経済の調査を進めた。インド・アルーナチャルは、生態的には、湿潤な「森のチベット」で、最も近代化の波から遠く、高地のプロトタイプの仕組みが残っている。標高の最も高い牧畜を専業とする民の村、中高位の畑作の村、低高位の水田の村が相互に、緊密なネットワークと交易の仕組みが今も保っており、近代化の波は最も少ない状況である。アルナーチャルの標高二〇〇mから四〇〇〇mまでの植生、民族、生業の垂直分布を調査し、高地の「牧畜民」は、四つのタイプに区分され、標高や社会性に応じて生業が異なっていた。標高二〇〇〇m以下の本来の焼畑耕作民は、最近導入された水田稲作の技術が、同一語族の民族間でも、標高での差異化を認め、高地への外来植物移入は高度とともに制限され、薬用植物を介する高地と低地のつながりが明らかにされた。

ラダークは、農耕・牧畜複合システムと長期交易ラダークより成り立っている。ドムカル三村のうち標高の低いド村から、より高いクラムリック村に移動し、高層草地を利用する。農耕時期と家畜の移動タイミングを合わせて成り立っており、農耕と牧畜が互いに密接に関連し合うことにより複合システムが機能する。ラダークでは、乾燥による生態資源が特に乏しいため、高度差を利用した、農耕と牧畜の複合とともに、牧畜地域のチャンタン高原やカシミールとの季節的な広域交易が特に欠かせない。ラダーク・ドムカルで衛星画像と聞き取りをもとに土地保有図を完成し、生業転換の実態（家畜保有の減少、飼育種構成の変化、化学肥料使用、耕作放棄地の立地）が明らかになった。また、ラダーク・チャンタン高原（標高四〇〇〇—四五〇〇m）で厳しい自然環境（貧困な牧草と大雪による家畜の死）、社会サービス（学校、病院）の低さゆえの、都市部レーへの移動の実態を調査した。ドムカルの氷河決壊の危険度の評価とともに、レー居住住民の生業と豪雨土砂崩れ災害の影響、気象変動との関連も明らかになってきた。

青海は、農耕と牧畜の接点の海晏と広大な

牧畜地帯にある交易都市の玉樹が調査地である。青海湖畔の海晏県（標高三〇〇〇―三五〇〇m）は、生態学的にも、農耕地帯と放牧地帯の境界の地であり、また、七世紀には、唐と吐蕃のせめぎ合いの歴史の中で境界と定められた、日月山に近接する地でもある。二万年～六千年前より、低地より青海湖チベット高地に居住し始めた可能性のあるチベット人と、二〇〇〇年前より居住してきた歴史を持つ漢人との間で、牧畜民と農民の交流が、長年密接に行なわれてきたと推測される。最近では、二〇〇六年にラサと西寧を結ぶ青海チベット鉄道が開通したが、チベット高原への玄関口という状況は現在も変わらず続いている。対象者は、海晏県の牧畜地域で長年牧畜を生業とし、現在も現役かまたはリタイアした高齢者である。四〇〇〇m以上の青海高原の広大な牧畜地帯の中にある、定住都市の玉樹（標高三七〇〇m）は、交易の中心都市であり、定住、都市化といった近代化の波により人々のライフスタイルはまったく変容してきている。

**生活習慣病の広がりと、背景としての生活様式や環境の変化が老人の Quality of life へ及ぼす影響**

高度差による生態と生業の違いの影響：ラダークの高度の異なる三村（二九〇〇―三八〇〇m）の農牧複合民を比較し、高血糖、粉塵による肺障害、睡眠障害のリスクの増大と高度との関連を認めた。アルナーチャルの高所牧畜民（三〇〇〇―三五〇〇m）が中高所（二〇〇〇m）農耕民に比べて、血圧と血中脂質濃度が高値を示した。

気候による生態の違いの影響：雨量の違いにより、資源の最も多様な「森のチベット」、「草原のチベット」、資源の最も乏しい「オアシスのチベット」の違いとともに、物資の流通を反映して、摂取食材の多様性の違いを認めた。すなわち、アルナーチャル＞青海（玉樹、海晏）＞ラダーク・都市部＞ラダーク・農村部の順に食事の多様性が低下した。

経済のグローバル化と近年の生活の変化の影響：青海において、伝統的な牧畜民の海晏と都市の玉樹居住チベット人の比較により、後者に、肥満、糖尿病、高血圧の増加と、生活機能障害、主観的な QOL の低下を認めた。玉樹住民内の職業別比較により、オフィスワーカーや、農牧畜リタイア者が現役者に比べて、糖尿病や予備群が高率であった。ラダークのドムカル在住農民と都市のレーへの移住者（ドムカルからの移住ラダーク人、チベット高原からの移住チベット人）の比較により、後者（いずれの移住者においても）に、高血圧と肥満の増加、肉と野菜の摂取頻度の違いを認めた。もともと牧畜を営むレー移住者が、ビジネス（商業、観光など）、僧侶、専業主婦に転身した場合に、肥満、高血圧、糖尿病を高率に認めた。

糖尿病アクセル仮説：伝統的なライフスタイルのアルナーチャルや海晏チベット人では糖尿病が少なかったが、資源の乏しいラダーク農村部住民は、糖尿病予備群が多く、食事の変化に脆弱である可能性を示した。市場経済の影響で肥満や高血圧の多い玉樹（三八〇〇m）住民には、同じ高所で低酸素の影響の同じラダークよりも、多血症が多く、それと関連して高血糖も頻発した。高地の生活習慣の変化は、糖尿病を加速する可能性を示した。

**高地高齢者のゆたかな QOL のためのヘルスケア・デザイン**

ラダーク・ドムカルにおいて、生活習慣病と老化の促進の予防のため、現地医療従事者と協力し、体重、血圧、運動量の毎月のモニタリングと指導の継続を始め、アルナーチャルでは、住民参加型のアクションプランを、さらに、ブータン・カリンでは、保健省との MOU を締結し、地域高齢者全員の調査とフォローアップ、全国民の高齢者のヘルスケア・デザインの策定に向けて、協力を開始した。

**四、これまでのプロジェクトをふり返って**

インド・ラダークで、豪雨土砂崩れ災害の直後にもかかわらず、検診調査を現地の救援活動とタイアップして行うことができ、ラダーク人のチャンタン高原やドムカルよりの移住者とともに、チベット高原からのチベット人移住者の調査を行なうことができ、移住歴と生業の変化の影響を多角的に調査することができたとともに、文化、生態班の生業、災害調査と連携することができた。

ブータンの保健省との MOU を締結し、高所プロの高齢者の生活習慣病と老化による生活機能障害の予防、ひいては、QOL の増進

を目的とする計画が、ブータンの「国民総幸福」の理念と呼応し、二〇一三年度からの全国民の第一一回総合計画を視野に入れて、高齢者のヘルスケア・デザインの策定に向けたパイロットスタディとして、スタートを切ることになり、メディアでも報道された。ブータンでは、文化、生態班がすでに生業や家畜の調査を開始しており、連携の素地も整っている。

二〇一〇年の中国青海省、玉樹地震の影響で、カウンターパートの青海大学医学医学院とは、連絡をとりながら、募金の援助を行った。ペルーの高所医学会において、カウンターパートと共同調査の発表、議論、来年度計画の打ち合わせを行った。

チベット医学との連携について、現地の文化に適合したヘルスケアデザインの策定のためには、人々の文化の核であるチベット仏教と密接に関係する、チベット医学の理解が必須であることを認識し、チベット伝統医との協力も行っていきたい。

糖尿病や高血圧などのグローバルな指標を、生活習慣の異なる、さらには環境適応の異なる人々に当てはめることへの妥当性について議論した。糖尿病、高血圧、肥満といったグローバル基準を前提とせず、高血糖、血圧値、高体重と低体重、高栄養と低栄養の各指標が、高所という特殊な環境で、どういう意味を持つのかを解析する。そのためには、各高所住民において、従来の世界基準による異常者群とともに、各高所地域住民内での平均値からの偏差の高い群を特定し、グローバル基準にしたがう日本人と比較しながら、それぞれの群が、身体的、精神的な障害や生活機能障害を引き起こしていないかの検討を行う必要がある。加齢とともに、障害（例えば動脈硬化や生活障害など）の増加速度の違い、つまり、老化の促進があるかを、異なる基準による異常群と正常群で、横断的に比較することも意義がある。究極的には、縦断的、経年的に予後（合併症や生活障害、死亡などの発生）の追跡調査が必要であり、ラダークとブータンで重点的に行う予定である。

高地文明というべき高地に適応した、賢明な自然利用のシステムが、近年のグローバリゼーションや温暖化の影響により崩れつつあり、それが「身体に刻み込まれた地球環境問題」として表面化している実態が明らかになりつつある。高地住民の疾病予防、健康とQOLの増進をめざすことが、我々自身の現在のライフスタイルを見直し、近代文明のあり方を再考することにつながる。そのデザインの策定のためには、地域の生態や文化に適合し、現地の研究者や生業、保健の従事者との交流、協力を通じた活動が、鍵になると考えられる。

## 会員動向

### 会員異動

## 編集後記

ＡＡＣＫ創設八〇周年。社団法人が一般社団法人となり、新会長に松林公蔵氏を迎えた。吉良龍夫会員の逝去で、ＡＡＣＫ発足時の原動力であった方々のほとんどが鬼籍に入られた。会員の平均年齢も年々高くなってはいるが、昨年より現役の山岳部員を会員に迎えたことで、ここは新会長が期待するように「熟年の叡智」と「若者の夢」が活動の源となってくれますように。

次号原稿の締め切りは一〇月二〇日。

発行日　二〇一一年九月一五日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松林公蔵
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
竹田晋也　気付
編集人　前田　司
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所